The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	トーキー移行期から大戦期における日本アニメーション映画研究
Author(s)	佐野, 明子
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47169
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏　　名	佐　野　明　子（さの　あきこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２１２９０　号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	**トーキー移行期から大戦期における日本アニメーション映画研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　北村　　卓 （副査） 教　授　春木　仁孝　　助教授　ヨコタ　村上　孝之

論　文　内　容　の　要　旨

近年、日本アニメーションが世界的に脚光を浴びている。しかし、そこで言及されるのはおもに 1960 年代以降の作品群に限られ、それ以前のものについての研究は端緒についたばかりといってよい。日本映画史研究およびメディア史研究においては昭和 10 年代に関する優れた研究が蓄積されるなか、アニメーションというジャンルについては空白部として放置されてきた。しかしアニメーションは一般の映画とともに上映され、人気ジャンルとして番組編成に欠かせない重要な存在であった。さらに表現形式が他ジャンルの映画と著しく異なり、年少者の観客層が圧倒的に多いなどの特殊性を有することなど、その歴史的経緯には独自の様相が多分に認められるため、重点的な調査・分析を要するものである。

本論文では、1928-45 年（トーキー移行期から大戦期）に定めて文献資料と映像資料の両面から調査・考察を行った。アニメーションが知識層、大衆、子どもにわたる多方面に浸透したのは 1930 年前後のトーキー移行期、すなわち 15 年戦争の開始期であった。こうした社会的背景のなか、アニメーションがいかに形成され発信/受容されたのか、国家、企業、観客、そして海外との相互関連という視点から多角的に分析し、その実態を明らかにした。

文献資料についてはアニメーション関連記事の書誌情報をリストにまとめた（計 2691 項目［附録①②］）。そのさい映画関連資料を多く所蔵する早稲田大学坪内記念演劇博物館、国立国会図書館、阪急学園池田文庫を中心に、関東と関西の公立・私立図書館ならびに大学図書館を利用した。映像資料は東京国立近代美術館フィルムセンターおよびプラネット映画資料図書館所蔵のフィルムを全て確認した。これらアニメーションに関する言説分析と映像分析を接続し、社会的背景に広く目配りすることを通してより実証的に解明した。

1950 年代以前の作品が看過される要因のひとつに、それらが従来の日本アニメーション史では「未熟な段階」の作品と位置付けられてきたことがあげられる。本論文では、戦前・戦中期の作品群をアニメーションという表現形式の「多様性」または「可能性」を体現したものとしてより積極的に捉え直し、進歩史観に基づく既成の日本アニメーション研究を批判的に再考した。

くわえて従来の日本アニメーション史研究に見られる問題点は、アメリカ以外の輸入作品の受容については、殆ど関心が払われていないことである。しかし当時の映画雑誌をひもとけば、様々な外国製アニメーション映画が縦横に論じられていたことがわかる。また戦時期には「大東亜共栄圏」とみなされたアジア各地においても日本製アニメーションが上映されているが、その詳細は明らかにされていない。本論文のいまひとつの意義は、国際市場の獲得とい

う側面のみが強調されがちな近年の日本アニメーション論に、アジアとの歴史的文化的交流という視点を示したことにある。

第１章「トーキー移行期における海外作品の受容」では、トーキー移行期（1930 年前後）の日本における外国製アニメーションの受容を論じた。アメリカ製トーキー・アニメーションは日本で人気を博し、映画館における「漫画大会」の流行現象を生み、さらにアニメーションというジャンルへの注目度・認知度を飛躍的に高めた。そうした点においてアメリカ製アニメーションの功績が重要なものであったことは間違いない。しかしながら同時に、日本製アニメーションをアメリカ製のものに及ばない「未熟」なものとみなし、アメリカ製アニメーションに近づくことを「進歩」とみなす言説が台頭していく。つまりアメリカ製アニメーションの一大流行は、日本アニメーションが本来内包していたはずの多様性を、アメリカ風のスタイルへ収斂させる方向性を決定づけたと考えられる。アメリカ製以外の外国製アニメーションも多数公開され評価されてはいたものの、アメリカ製アニメーション（すなわち「漫画映画」）とは別のカテゴリーに属するものとみなされた。

第２章「日本アニメーションの変遷過程」では、トーキー移行期から日米開戦（1941 年）にかけて、日本製アニメーションがいかなる変遷を見せたのか検討した。アメリカ製アニメーションを規範化する時流のなか、まず戦前の日本アニメーションを代表する作家のひとりである大藤信郎は「千代紙映画」→「漫画映画」→「影絵映画」と二度にわたる転向を見せ、日本アニメーション界にもたらされた動揺を端的に体現する。また「影絵映画」は 20 年代から 40 年代にかけて前衛映画、教育映画、プロパガンダ映画、対外向映画など時代が要請する多様な用途に応じて生成/受容された。影絵映画は情報量の少なさから解釈の多様性を生むという特性を有し、主流の物語映画とは異なる映画的効果を有するジャンルとして、映画史において傍流ながら現在も存続する。そして大藤信郎の漫画映画『蛙三勇士』（1933）の映像テクストには、アメリカ製アニメーションに類似する軽妙さや当時の流行歌に溢れ、さらに「肉弾三勇士美談」の価値を下げるような演出が見られるという、軍国主義とモダン文化が相克するさまが認められる。日中戦争が勃発（1937 年）すると、国家による映画統制が進められるが、アニメーションは統制/保護の対象外に放置された。ナショナリズムが昂揚し「アメリカ」への憧憬と排除という矛盾したイデオロギーが併存するなか、日本の実作者たちは「アメリカ」と「日本」の中間を行くような折衷策を模索する。

第３章「中国アニメーション『鐵扇公主』の受容」においては、中国の長篇アニメーション『鐵扇公主』が日本映画界に与えた影響の重要性を明示し、ドメスティックな枠内に閉ざされた従来の日本アニメーション論に欠落する視点を導入することで新たな問題提起をした。日米開戦後、アメリカ製アニメーションの上映が禁止されるなか、アジア初の長篇アニメーション『鐵扇公主』が大ヒットを記録する。『鐵扇公主』の映像テクストは、「アメリカ」的な要素を含むいっぽう「支那」的な雰囲気を見事に提示し、さらに「映画的」な演出に優れたことから、アメリカ以外のオルタナティブとして日本のアニメーション関係者から脚光を浴びた。また『鐵扇公主』の興行的成功は、日本のアニメーションが長尺化する動因となり、さらにアニメーションと長編文化映画の併映というプログラムを定着させ、アニメーションが国策映画の「客寄せ」という役割を果たす契機ともなったのである。

第４章「教育メディアとしての日本アニメーション」では、教育の場で上映された日本アニメーションについて、産官学（大阪毎日新聞社、文部省、教育関係者）との相互関連から検討した。教育の場で利用された映画は「教育映画」として一括りに扱われる傾向にあるが、教育用アニメーションの独自の歴史的経緯を示すことで、既存の教育映画研究に対する批判的なオルタナティブを提示した。1930 年代の日本製アニメーションの主な供給先は学校や公共の上映会であった。まず文部省が映画による直轄行政と人々の教化のため、大人から子どもまでを対象にアニメーションを製作・上映した。また子どもたちを映画館から隔離する社会的状況のなか、大阪毎日新聞社主導の映画教育運動が台頭するが、そこで上映された学校教育用アニメーションに対し、教育関係者たちは必ずしも教育効果を期待していない。国民学校における映画利用が法文化された大戦末期にも、なお教育関係者はアニメーションに一枚岩的に教化効果を求めず、当時重視された「科学」とそれを補完する範囲での「空想」を融合するような作品を要望した。

第５章「太平洋戦争期の日本アニメーション」においては、まず日米開戦後に公開された日本初の長篇アニメーション『桃太郎の海鷲』のテクスト分析を行い、それが日本の国策および映画界に与えた影響を検討した。『鐵扇公主』に続き『桃太郎の海鷲』も大ヒットを記録したことは、国家や企業にアニメーションの利用価値を知らしめた。強制上映が定められていた「文化映画」にアニメーションも認定される旨が通知され、アニメーションの定期的な製作・

上映や、海軍省後援による長編が再び製作される動因となる。戦時下の日本アニメーションは長らく国家による映画統制/援助の埒外におかれてきたが、低迷する日本映画界において想定外の観客動員数を記録したことによって、国家や企業の方向性を決定づけたのである。次にアジア各地で上映された日本アニメーションについて、上映情報をリストにまとめ、作品内容を分析した。その結果、占領地において内地とは異なる上映方針がとられたことが明らかになった。すなわち現地住民に対しては「教化」より「慰安」を目的とする傾向にあり、理解が容易なものが優先され、内地では上映が制限された作品すら上映されたのである。

論文審査の結果の要旨

本研究は、1928-45 年（トーキー移行期から大戦期）における日本アニメーション（以下アニメと略す）の形成および実態について、国家、企業、観客、海外との相互関連という視点から、豊富な文献資料・映像資料をもとに明らかにしようとする新たな試みである。

第１章では、トーキーへの移行期における多様な海外アニメの受容過程、またその中でアメリカ製アニメがいかにして規範化されていったのかを多くの資料に基づいて詳細に論じている。第２章では、トーキー移行期から日米開戦（1941 年）にかけての日本アニメの変遷において、モダニズムと軍国主義の相克、アメリカへの憧憬と排除という矛盾した方向性が混在することを、戦前の日本アニメを代表する大藤信郎の綿密な作品分析を通して明らかにしている。第３章では、これまで看過されてきた中国製アニメ『鐵扇公主』（1942）の日本映画界への影響について、同時代のさまざまな資料およびテクスト分析に基づいて検討し、独自の世界を有する『鐵扇公主』が、アメリカ製アニメのオルタナティブとして見なされたことを説得的に論じている。第４章では、戦前の教育の場で上映された日本製アニメの歴史的経緯を、国家、教育現場、配給会社の相互関連から、豊富な資料を駆使しつつ、その全体像の解明に迫っている。第５章では、太平洋戦争期に製作された日本アニメの実態を日本国内のみならず当時の占領地における資料をも渉猟し、上映リストを作成するとともに、占領地では内地と異なり、教化ではなく慰安を目的とする傾向が顕著であったことを見出している。

本研究は、独創性に富み、資料の分析も緻密で説得力がある。従来、映画史やメディア史研究の中で空白地帯となっていた戦前日本のアニメーション研究における基礎的文献にもなりえる貴重な研究であると思われる。ただし、各章それぞれはよくまとまっているが、相互の有機的な繋がりなどにおいて、なお工夫すべき余地はある。しかしながら、本論文全体の価値を損なうものではない。

以上のように、本論文は、博士（言語文化学）の学位請求論文としての成果を十分にあげているものと評価できる。